令和７年度 ヤングケアラー実態調査に関する報告書（案）

令和８年３月

栗 山 町 福 祉 課
栗山町教育委員会

Ⅰ　調査の概要

１．調査目的

本調査は、栗山町におけるヤングケアラー・若者ケアラーの実態を把握することで、その現状や課題、ニーズなどを把握し、今後の支援体制の構築や新たな社会資源を開発するための基礎資料として実施した。

２．調査対象及び定義

栗山町内の小学校５年生及び６年生、中学校全学年、高校全学年（以下「小中高生」という。）、北海道介護福祉学校全学年（２年制の専修学校、以下「介護福祉学校」という。）による全数調査

３．調査方法

調査票を配布し、直接回収又は、Ｗｅｂフォームにて実施

４．調査時期

令和 7 年 11 月～令和 8 年 2 月

５．回収結果

在籍数　579 件　回収数　507 件　回収率 87.6%（有効回答数 507 件）

学校/項目	在籍数	回収数	有効回答数	回収率
栗山小学校	109	100	100	91.8%
角田小学校	18	18	18	100%
継立小学校	20	13	13	65.0%
小学校全体	147	131	131	89.1%
栗山中学校	259	235	235	90.7%
栗山高校	129	117	117	90.7%
介護福祉学校	44	24	24	54.5%
合計	579	507	507	87.6%

６．回答者属性

（１）学　年

回答者の学年と回答数は下記のとおりとなった。

設問：あなたの学年を教えて下さい。

学　校	５年生	６年生	無回答	合計
小学校	68	63	0	131

学　校	１年生	２年生	３年生	無回答	合計
中学校	72	81	82	0	235
高　校	33	46	38	0	117

学　校	１年生	２年生	合計
介護福祉学校	11	13	24

７．報告書について

（１）集計は小数点第２位を四捨五入している。そのため回答比率の合計は必ずしも 100%にならない場合がある。

（２）２つ以上の回答を可能にした複数回答の場合は、その回答比率の合計は 100%を超える場合がある。

（３）数表、図表、文中に示すＮは、比率算出上の基数（標本数）である。全標本数を示す「全体」を「Ｎ」とし、「該当数」を「ｎ」で表記する。

（４）調査票のうち、性別を回答する項目に、小学校のＷｅｂフォーム設定に誤りがあったことから、小学校の調査のうち、性別に関わる項目に関しては、本報告には不計上とする。

（５）子ども若者育成支援推進法でのヤングケアラーの定義とは別に、本報告書でいう「ヤングケアラー」は、小中高校に通学している１８歳未満の子ども（高校就学中の１８歳の対象者を含む・以下「ヤングケアラー」という。）とし、「若者ケアラー」は「１８歳以上３０歳未満」の「若者」を対象として、その性質から集計を区分している。そのため、「若者ケアラー」の表記は、北海道介護福祉学校の回答者である。（以下「若者ケアラー」という。）

（６）報告書でいう前回の調査結果とは、令和５年に本町で行われたヤングケアラー実態調査を指す。詳細は、『ヤングケアラー実態調査に関する報告書』（栗山町・栗山町教育委員会　令和６年２月）を参照。（URL https://www.kuriyama.hokkaido.jp/site/keara-sien/24610.html）

（７）当町において、令和４年、令和５年と今回の調査を行っているが、各調査の設問内容を一部整理しているため、本調査を基軸としつつ同項目に関しての比較し検証している。なお、北海道介護福祉学校を対象にした調査は、令和５年度調査より実施しており令和４年度調査には含まれない。

（８）設問では、小中学校と高校では文章表記を調査対象に合わせて変更している。当報告では、小中高校を基準として表記している。

Ⅱ　調査結果

１．ヤングケアラーの総数

所属	ヤングケアラー		合計	%	（参考） 北海道　R7	（参考） 全国　R3
	（町内）	（町外）				
栗山小学校	18 人	0 人	18 人	13.7%		
角田小学校	0 人	0 人	0 人	0.0%		
継立小学校	0 人	0 人	0 人	0.0%		
小学校全体	**18 人**	**0 人**	**18 人**	**13.7%**	**6.0%**	**6.5%**
栗山中学校	**8 人**	**0 人**	**8 人**	**3.4%**	**3.9%**	**5.7%**
栗山高校	**1 人**	**1 人**	**2 人**	**1.7%**	**2.9%**	**4.1%**
全体	**27 人**	**2 人**	**28 人**	**5.8%**		

所属	若者ケアラー		合計	%	（参考） 大学生 北海道　R7	（参考） 大学生 全国　R3
	（町内）	（町外）				
介護福祉学校	**0 人**	**2 人**	**2 人**	**8.3%**	**3.1%**	**6.2%**

栗山町におけるヤングケアラーと思われる子ども（以下「ヤングケアラー」という。）の総数は 28 人で、小中高校生全体の 5.8%となった。前回の調査結果から見て、1.6 ポイント低い結果になった。なお、学校別では小学校が 13.7%（18 人）。これは全道平均 6.0%と比べると 7.7 ポイント高く、全国平均 6.5%（対象：小学６年生）から見ても 6.7 ポイント高い。

中学校では 3.4%（8 人）になった。これは、昨年度の調査結果から見て、4.2 ポイント低い。全道平均（対象：中学２年生）3.9%と比べて 0.4 ポイント低く、全国平均（対象：中学２年生）5.7%からは 2.3 ポイント低い。

高校では 1.7%（2 人）。全道平均（対象：全日制　高校２年生）2.9%と比べて 1.2 ポイント低く、全国平均 4.1%からも 2.4 ポイント低い結果となった。

介護福祉学校では、全体の 8.3%が若者ケアラーになった。これは、大学生と比較して全道平均の 3.1%と比べると 5.2 ポイント高く、全国平均から比べると 2.1 ポイント高い。

２．同居家族の属性

設問：一緒に住んでいる人を教えて下さい。（複数回答）

回答／件数	小中高校全体 N＝483	%	ヤングケアラー n=28	%	介護福祉学校 N＝24	%	若者ケアラー n=2	%
１人暮らし					12	50.0%	0	0%
母親	435	90.1%	28	100%	8	33.3%	2	100%
父親	363	75.2%	24	85.7%	6	25.0%	2	100%
きょうだい	357	73.9%	21	75.0%	3	12.5%	1	50.0%
祖母	78	16.1%	7	25.0%	1	4.2%	1	50.0%
祖父	62	12.8%	5	17.9%	1	4.2%	1	50.0%
その他	41	8.5%	1	3.6%	4	16.7%	1	50.0%

同居家族の属性を見てみると、小中高校全体では「母親」が最も多く 90.1%であり、「父親」75.2%、「きょうだい」73.9%となった。ヤングケアラーもほぼ同様の傾向にある。

３．ケアの対象者

設問：家族のなかで、あなたがお世話している人はいますか？（例　病気や体の不自由な人　高齢な人や　まだ小さい兄弟姉妹等）

回　答	ヤングケアラー 件数 n=28	%	若者ケアラー 件数 n=2	%	北海道			
					小学校	中学校 (2学年)	高校 (全日)	大学
きょうだい	18	64.3%	1	50.0%	47.2%	38.8%	28.5%	32.4%
祖父	4	14.3%	0	0%	19.9%	3.7%	4.5%	11.8%
祖母	4	14.3%	1	50.0%	27.0%	8.2%	10.1%	23.5%
母親	2	7.1%	0	0%	8.7%	4.7%	7.9%	47.1%
父親	2	7.1%	0	0%	5.1%	1.7%	2.2%	17.6%
その他	1	3.6%						
無回答	0	0%						

ヤングケアラーのケアの対象者を尋ねると、「きょうだい」が最も多く 64.3%（18 人）。次に「祖父」と「祖母」が 14.3%（4 人）、「父親」及び「母親」が 7.1%（2 人）という結果になり、ヤングケアラーは「きょうだい」の世話を行うケースが多いが、そのケア対象は多岐に渡ることがわかった。

４．ケアの理由

設問：お世話が必要な理由を教えて下さい（複数回答）

回　答	ヤングケアラー 件数 n=28	%	若者ケアラー 件数 n=2	%
幼いため	16	57.1%	0	0.0%
高齢のため	4	14.3%	1	50.0%
身体や心などに「障がい」があるため	2	7.1%	1	50.0%
病気やけがのため	1	3.6%	0	0.0%
お酒などを止められなくなっているため	1	3.6%	0	0.0%
自分一人で食事や服を着たりできないため	1	3.6%	0	0.0%
認知症のため	0	0.0%	0	0.0%

ヤングケアラーにケアの理由を尋ねると、最も多いのが「幼いため」という回答で 57.1%（16 人）になった。次に「高齢のため」が 14.3%（4 人）、「身体や心などに「障がい」があるため」が 7.1%（2 人）、「病気やけがのため」、「お酒などをやめられなくなっているため」及び「自分一人で食事や服を着たりできないため」が 3.6%（1 人）という結果になった。なお、若者ケアラーは「高齢のため」と「幼いため」が 50.0%（1 人）の結果になった。

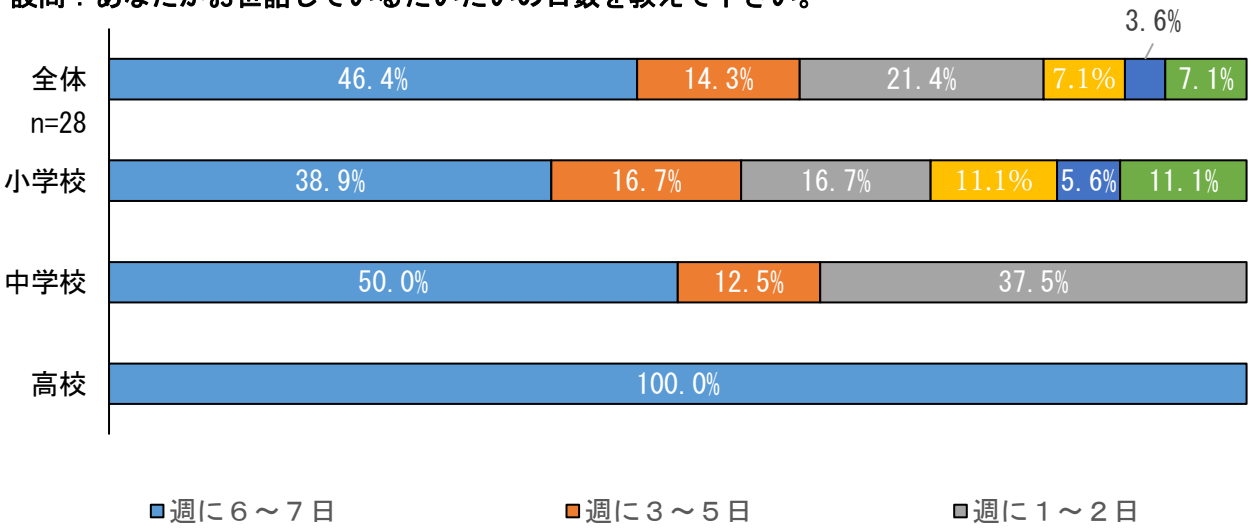
５．アルバイトの有無

設問：家計を支えるためにアルバイトをしていますか。

高校生のヤングケアラー及び若者ケアラーに、病気や障がいを持つ家族がいることで、家計を支えるためにアルバイトをしているかを尋ねたところ、高校生ではヤングケアラー3 人中 1 人が家計を支えるためにアルバイトをしているという結果になった。なお、若者ケアラーには該当者はいなかった。

６．ケアの日数と時間

設問：あなたがお世話しているだいたいの日数を教えて下さい。



ヤングケアラーがその家族をケアする日数を、１週間のうちにどれくらいの日数か尋ねると 46.4%（13 人）が「週に６～７日」と、ほぼ毎日ケアを行っていると回答した。なお、若者ケアラーでは、すべてが同様の回答（2 人中 2 人）をした。このうちヤングケアラーで、ほぼ毎日ケアを行っている対象は 7 人中 6 人[1]が「きょうだい」と回答し、日常的に「きょうだい」の世話をしていることがわかった。

具体的なケア時間[2]では、登校日の場合、「その日によって違う」と回答した者が最も多くが 35.7%（10 人）になった。また、休校日の場合は 32.1%（9 人）になり、日々のケア状況によりケア日数と時間は左右されることがわかった。

なお、これに「わからない」と回答した者を加えると、登校日及び休校日ともに 46.4%（13 人）になり、およそ半数近いヤングケアラーがケアを行う明確な時間を出すことが難しいとの回答し、前回の調査同様、ケア時間を掴みにくいという実情が明らかになった。

注１　「週６～７日」ケア対象者とクロス集計するとヤングケアラーのうち１人のケアの対象者は「祖父」または「祖母」という結果になった。ヤングケアラーが日常的に「お世話」ではなく「ケア」という点で、被援助者を支えていることがわかった。

注２　ケア時間に関しては、具体的な時間を回答した者は、登校日は「１時間未満」の回答が 4 人、「１時間以上２時間未満」が 4 人、「２時間以上３時間未満」が 2 人の回答だったが、「５時間以上」の長時間が 2 人とケアに追われる生活実態があるヤングケアラーと思われる子どもが存在する結果になった。また、休校日では「１時間未満」の回答が 2 人、「１時間以上２時間未満」が 4 人、「２時間以上３時間未満」の回答が 2 人、「5 時間以上」の長時間が 3 人であり、ヤングケアラーのうち平日休日問わずケアに追われている者が存在している。また、「わからない」が平日 3 人、休日 4 人、「その日によって違う」が平日 10 人、休日 9 人とケア時間が不透明であり、流動的なことがわかった。

７．ケアを始めた年齢

設問：あなたはいつからお世話をしていますか。（ｎ=28）

（単位：人）

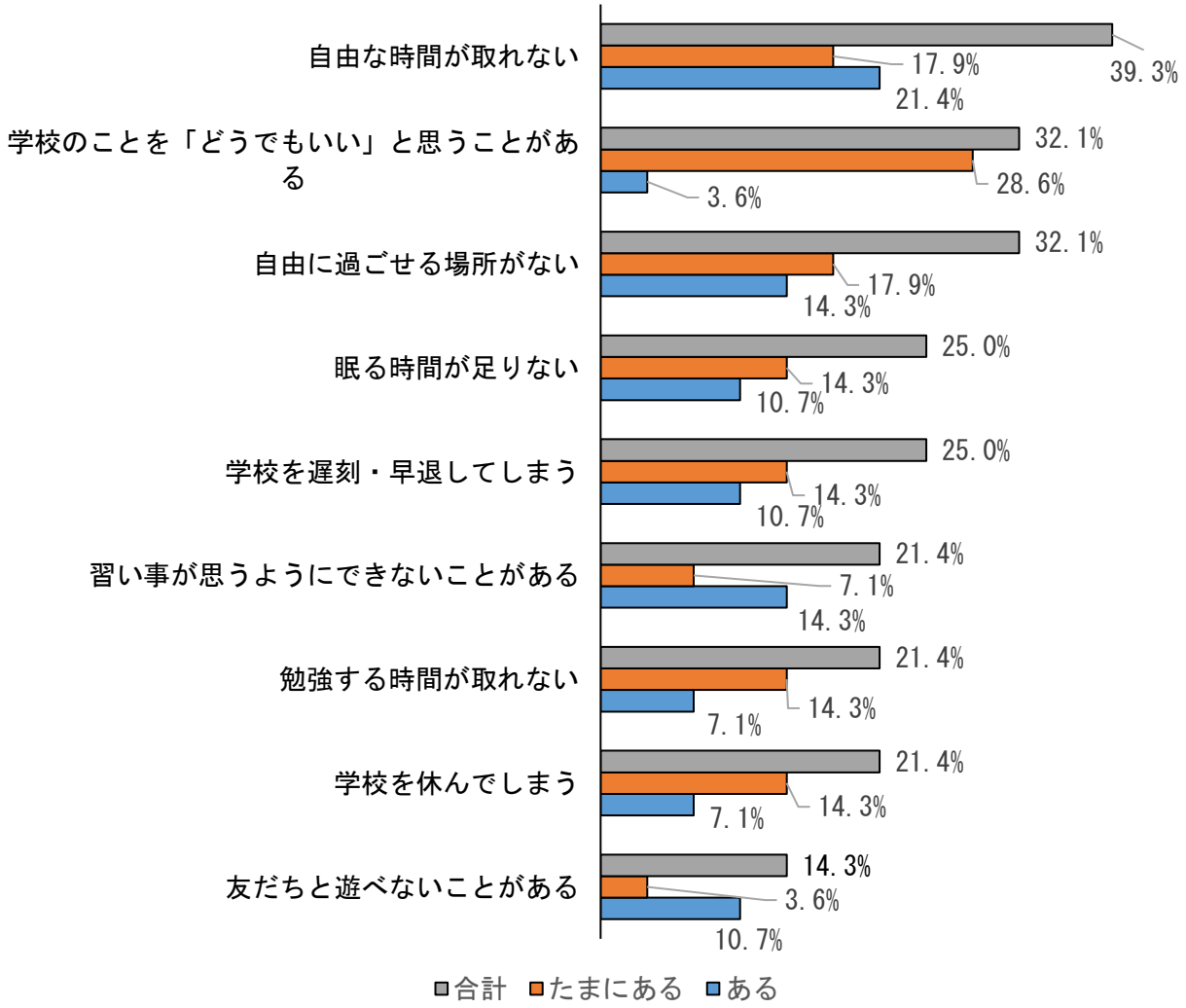
設問／学校	小学校	中学校	高校	介護福祉学校
小学校入学前から	8	3	0	0
小学校１年生の頃から	1			
小学校２年生の頃から	0			
小学校３年生の頃から	1			
小学校４年生の頃から	4			
小学校５年生の頃から	1			
小学校６年生の頃から	1			
小学校の頃から		4	2	0
中学校１年生の頃から		1		
中学校２年生の頃から		0		
中学校３年生の頃から		0		
中学生の頃から			0	1
高校に入学してから			0	
高校生の頃から				
介護福祉学校に入学してから				1

ヤングケアラーにケアを始めた年齢は、小学校入学前からが 39.3%（11 人）が就学前からお世話やケアを行っていることがわかった。これは中学校や高校も同様の傾向にあり、小学校就学前後からという早い段階からケアの開始が開始されていることがわかった。これを小学校入学以前及び小学校在学時からケアを行っている者に対象を絞ると 25 人(89.3%)がケアやお世話を早期から行っていることが分かる。

８．ケアによる生活の影響

設問：あなたは、お世話をしていて次のようなことはありますか。（複数回答）

ヤングケアラー（n=28）



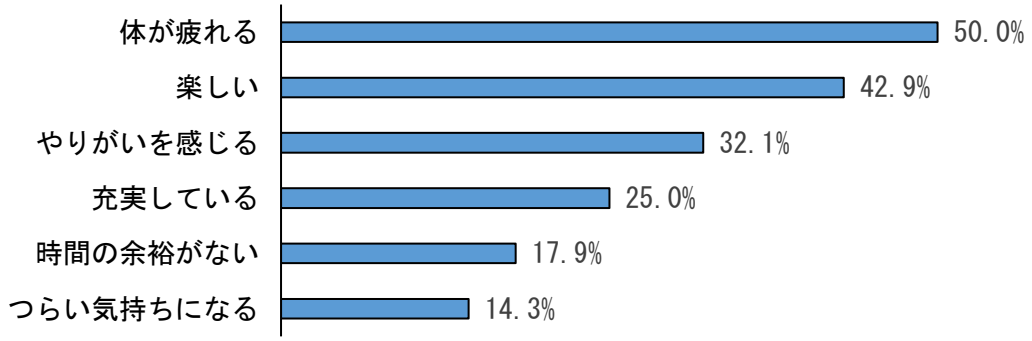
家族のケアを行うことで、ヤングケアラーの生活にどのような影響があるのかを尋ねたところ、「自由な時間が取れない」が最も多く 39.3%（11 人）になり、前回調査と比べて 12.0 ポイント（前回調査値 27.3%）と時間的に拘束がされていることがわかった。続いて、「学校のことを「どうでもいい」と思うことがある」と「自由に過ごせる場所がない」が 32.1%（9 人）。「眠る時間が足りない」、「学校を遅刻・早退してしまう」25.0%（7 人）になり、生活や学業に大きな影響を与えていることがわかった。全体的に見ると 20%から 30%代の回答が多く、回答傾向が平準化しているのは、前回の調査と同様の結果になった。

なお、若者ケアラーの場合は、特にエピソードは発生しないという結果になった。

９．ケアの受け取り方

設問：お世話をしていて思うことを教えてください。（複数回答）

ヤングケアラー（n=28）



今回の調査では、日常的なケアにより、「体が疲れる」と回答している者が最も多く、50.0%（14 人）と前回調査と比べて 22.7 ポイント（前回調査値 27.3%）高くなった。ケア負担がある回答に絞ると、次に「時間の余裕がない」と回答した者（5 人）が 17.9%（前回調査値 3.0%）、「つらい気持ちになる」と回答した者（4 人）が 14.3%（前回調査値 6.1%）と前回調査と比べて高い結果に転じ、心身上のストレスを抱えていることがわかった。

一方で、そのケアが「楽しい」と回答した者（12 人）が 42.9%（前回調査値 24.2%）、「やりがいを感じる」と回答した者（9 人）が 32.1%（前回調査値 9.1%）、「充実している」と回答した者（7 人）が 25.0%（前回調査値 12.1%）という回答が多くなり、前回調査と比べて高い傾向になった。

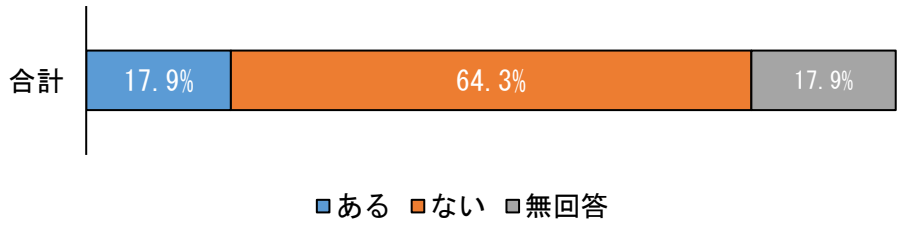
この結果から、今回の調査対象のヤングケアラーでは、ケアを日常的に行われているために疲労感を感じていながらも、自己肯定感や目的意識が高いヤングケアラーが多い傾向にあることがわかった。

若者ケアラー2 人中、「やりがいを感じる」及び「楽しい」が 2 人（100%）、「充実している」が 1 人（50.0%）となった。

１０．相談の有無及び対象

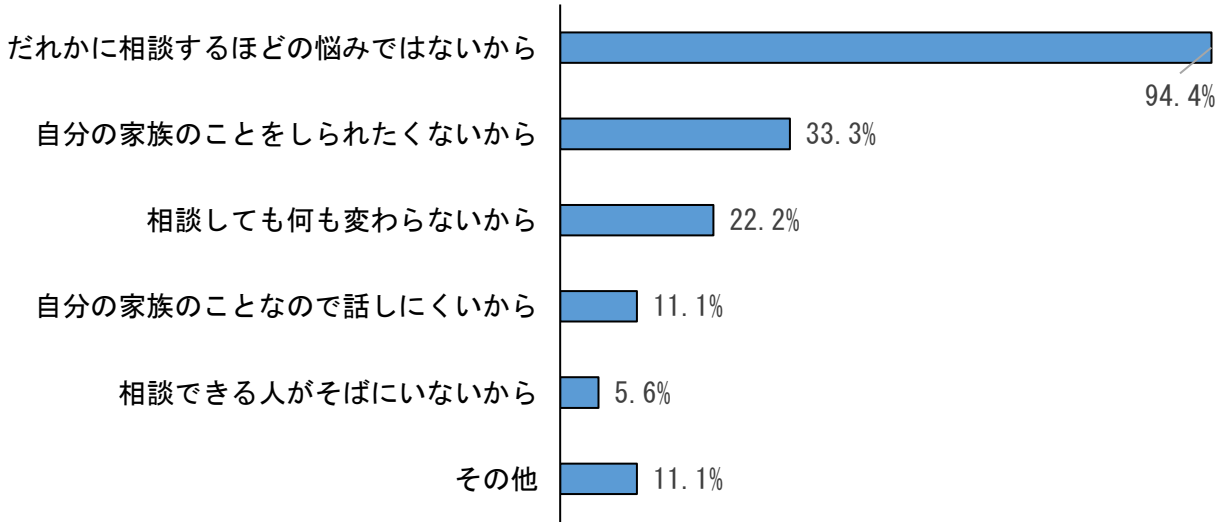
設問：相談した人や方法を教えてください。

ヤングケアラー（n=28）



設問：相談していない理由を教えて下さい。

ヤングケアラー（n=18）



ヤングケアラーは、前回の調査と同様にケアのことの相談を他者に行うことが少なく 64.3%（18 人）が「ない」と回答した。前回調査よりも 14.5 ポイント低い（前回調査値 78.8%）結果になった。一方で相談したことが「ある」と答えた者は 17.9%（5 人）と 8.8 ポイント（前回調査値 9.1%）増加した。

「ある」と答えた 5 人の内訳は「家族」が 2 人、「友だち」は 3 人であり、学校や相談支援機関に相談した例は前回調査同様になかった。なお、若者ケアラーは、家族、友人 1 人とそれぞれ回答しており、相談をしない、またはできないケースはなかった。

ヤングケアラーの相談していない理由の内訳は、「誰かに相談するほどの悩みではないから」が 94.4%（17 人）と前回調査よりも 29.0 ポイント（前回調査値 65.4%）と増加し、ケア・お世話を大きな悩みとして感じていない、または気づいていないという回答が多数を占めた。次に、「自分の家族のことなので知られたくないから」が 33.3%（6 人）、「相談しても何も変わらないから」が 22.2%（4 人）という結果になった。

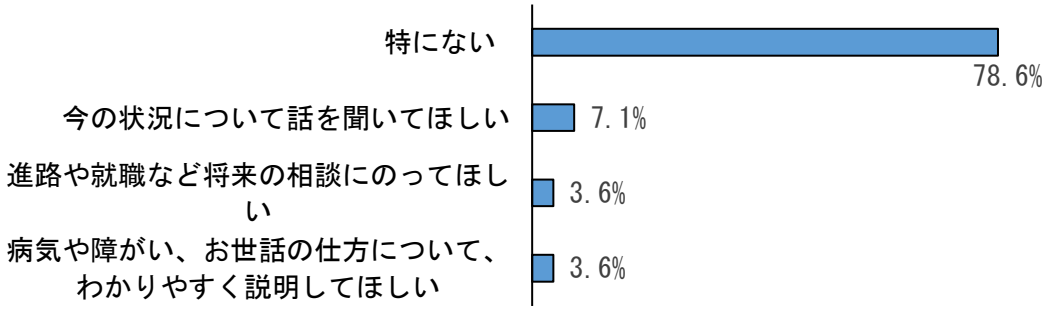
今回の調査結果では、ヤングケアラーが周囲に家族を含めて周囲に相談するケースが増えているものの、一方で、家庭内のケア・お世話を悩みとして受け止めるほどではないと捉えている傾向が強いため、課題・問題があっても、ヤングケアラー自身が自覚していない可能性がある。

このことから見ても今後とも周知・啓蒙活動の必要性や、子どもが発信したくてもできない環境である可能性を考慮し、大人側の受信力を高める必要性がある。

１１．ケアに関して支援してほしいこと

設問：お世話をしていることに対して、支援してほしいことはありますか。

ヤングケアラー（n=28）

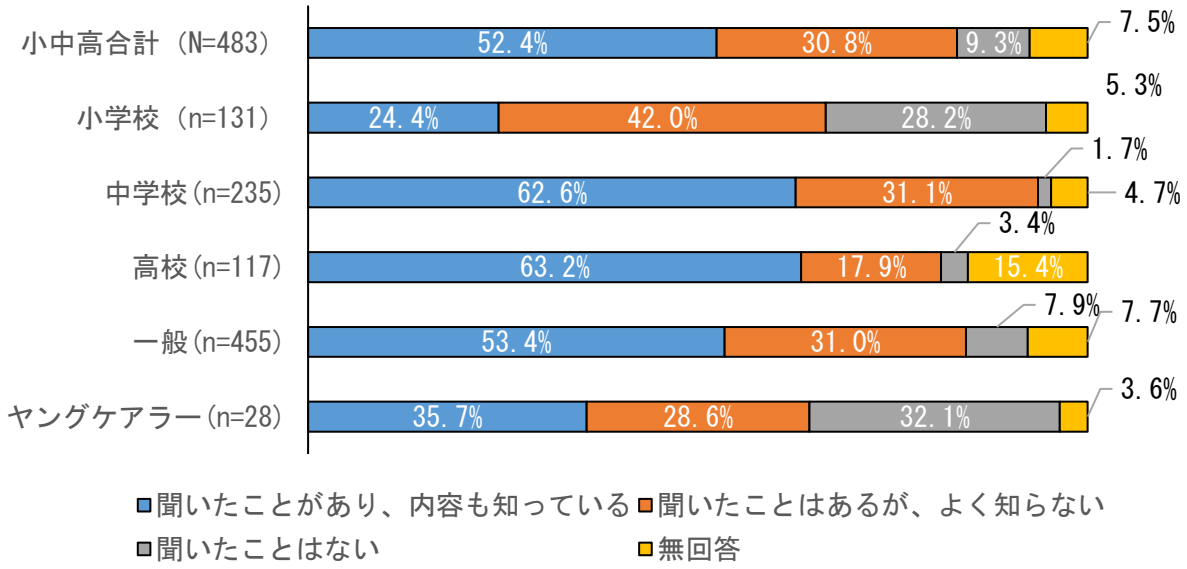


ヤングケアラーがケアを行っている中で、支援してほしいことは何か尋ねると、「特にない」が 78.6%（22 人）と前回調査に比べて 30.1 ポイント（前回調査値 48.5%）増加し、具体的な支援の必要性を感じていないヤングケアラーが多いことがわかった。その他の回答では、「今の状況について話を聞いてほしい」が 7.1%（2 人）、「病気や障がい、お世話の仕方について、わかりやすく説明してほしい」と「進路や就職など将来の相談にのってほしい」が 3.6%（1 人）の結果になり、ケア・お世話により家庭内において何らかのストレスがあり、心情的な訴えや具体的な対応方法を求めているヤングケアラーが存在することがわかった。なお、若者ケアラーでは、全ての回答者（2 人）が「特にない」と回答した。

この問題は、質的な意味が大きく、個々のニーズを適切に掴み丁寧に対応する必要がある。

１２．ヤングケアラーの認知度

設問：「ヤングケアラー」という言葉を聞いたことがありますか。



回答者全てに、「ヤングケアラー」の言葉の認知度を尋ねた。小中高校全体では、「聞いたことがあり、内容も知っている」が 52.4%（前回調査値 37.7%）と前回調査と比べて 14.7 ポイント増加した。「聞いたことがあるが、よく知らない」30.8%（前回調査値 35.5%）と 4.7 ポイント低下し、合計で 83.2%（前回調査時 73.2%）の回答者が、「ヤングケアラー」の言葉自体を聞いたことがあるという結果になり、10.0 ポイントの増加になった。

ヤングケアラーの言葉の認知度は、令和４年の調査時には 70.8%、令和５年度には 73.2%という結果になったが、町では令和５年度より毎年ヤングケアラー出前講座を行っているため、子どもたちにヤングケアラーの具体像の理解が進んでいる傾向を読み取ることもでき、一定の成果があったと思われる。

「ヤングケアラー」の言葉を耳にする子どもたちは増えている一方で、「聞いたことがない」と回答した子どもが 9.3%になった。これにヤングケアラーの内容理解まで至らない子どもたちを含めると全体の 40.1%いることから、今後とも広報・啓発活動は継続的に進める必要がある。

学校別だと、言葉自体を耳にしている子どもたちは、小学校で 66.4%（前回調査値 62.7%）、中学校が 93.7%（前回調査比 78.7%）、高校が 81.1%（前回調査値 80.3%）と中学校では大きく伸びがあるものの、調査結果の傾向に大きな変化はなかった。

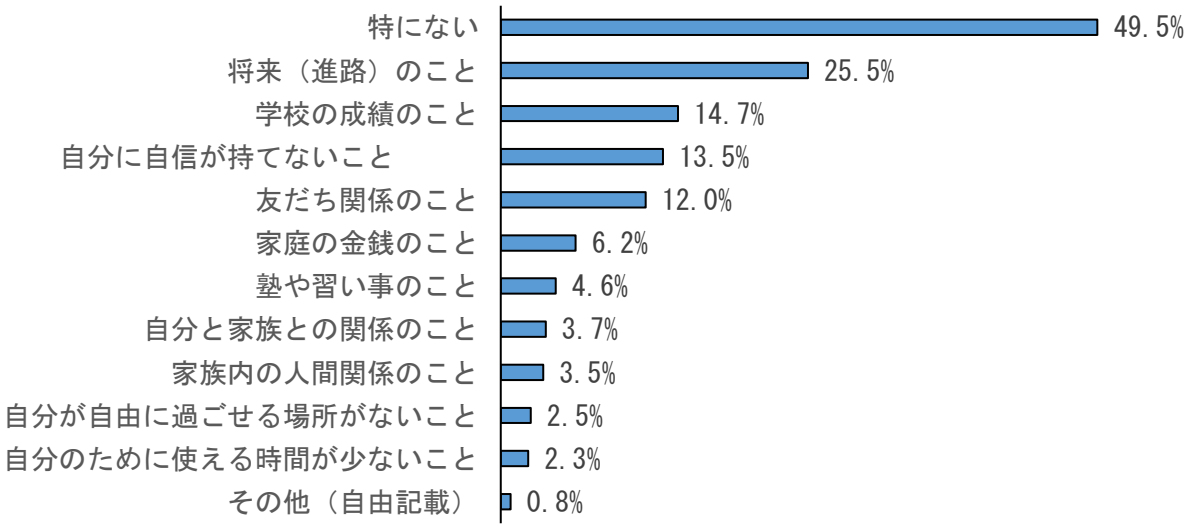
これをヤングケアラーに回答を絞り込むと、「聞いたことがあり、内容もよく知っている」が 35.7%（前回調査値：38.1%）、「聞いたことがあるが、よく知らない」が 28.6%（前回調査値 9.5%）であり、合計すると、ヤングケアラーの言葉の認知度は、64.3%（前回調査値 47.6%）となった。これはヤングケアラーではない子どもたち（以下「非ヤングケアラーという。」）の 84.4%と比べると、20.1 ポイント低い。ヤングケアラーも、その他の子どもたちも、ヤングケアラーの言葉自体の認知度は高まりつつあるが、昨年度同様にヤングケアラー自体は、その言葉に対しての認識が低い傾向にあることがわかった。

また、介護福祉学校に、ヤングケアラーの言葉の認知度を尋ねたところ、79.2%が、ヤングケアラーの言葉を聞いたことがあると回答した。前回調査では回答者全てが知っていると回答したが、本調査では認知度に低下が見られた。

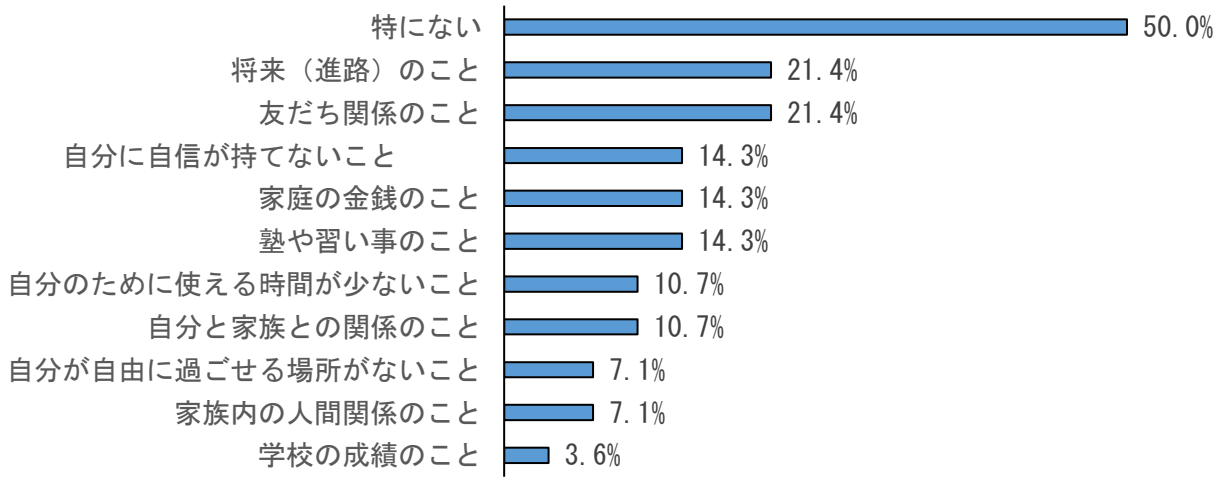
１３．日常生活での悩み事・困りごと

設問：普段の生活で悩んだり、困っていることはありますか。（複数回答）

小中高校全体（N=483）



ヤングケアラー（n=28）



日常生活での悩み事を回答者全てに尋ねると、「特にない」が小中高校全体、ヤングケアラーともに最も高く、小中高校全体では 49.5%（前回調査値 46.7%）、約半数の子どもが生活上の悩みがない結果になった。ヤングケアラーでは、50.0%（前回調査値 57.6%）になり、7.6 ポイント低下しているが、ほぼ同様の傾向になった。ケアする環境下ではあるが、生活上悩みを抱えていない、または意識していない生徒が半数近くになりになり、家庭内でケアを行っているものの問題として意識化できていない可能性があることを示唆している。

回答者のうち、悩みごとや困りごとを抱えている子どもに対象を絞ると、小中高校全体では、「将来（進路）のこと」が 25.5%（前回調査値 17.2%）、「学校の成績のこと」が 14.7%（前回調査値 16.3%）、「自分に自信が持てないこと」が 13.5%（前回調査値 11.4%）、「友だち関係のこと」が 12.0%（前回調査比値 9.4%）と、前回調査と傾向は変わらないが、将来（進路）に対して回答が増加しているが、全体的にはほぼ横ばいの結果だった。

これをヤングケアラーの回答者のうち、悩みごとや困りごとを抱えている子どもに対象を絞ると、「将来（進路）のこと」が 21.4%（前回調査値 6.1%）と 15.3 ポイント増加した。「自分に自信が持てないこと」（前回調査値 28.6%）、「塾や習い事のこと」（前回調査値：1.3%）、「家庭の金銭のこと」（前回調査値 2.9%）がそれぞれ 14.3%と増加している傾向にある。

また、ヤングケアラーと非ヤングケアラーを比較すると、「学校の成績のこと」が 11.8 ポイント（非ヤングケアラー値 15.4%）、「将来（進路）こと」が 4.4 ポイント（非ヤングケアラー値 25.8%）、非ヤングケアラーの方がヤングケアラーよりも高い。一方で、ヤングケアラーの方が非ヤングケアラーよりも「塾や習い事のこと」では 10.3 ポイント（非ヤングケアラー値 4.0%）、「家庭の金銭のこと」では 8.6 ポイント（非ヤングケアラー値 5.7%）が高い傾向になった。

今回の調査対象のヤングケアラーは、小中高校全体と自己肯定感は変わらないものの、学業のことには不安を覚えていないが、置かれている家庭環境で習い事や、金銭面など身の回りの生活につながる不安を抱えている子どもが多い傾向になった。

介護福祉学校の場合、日常生活での悩み事は、「将来（進路）」のこと」と「特にない」と答えた者が 20.8%、「学校の成績のこと」、「家庭の金銭のこと」及び「自分に自信が持てないこと」が 16.7%になった。

なお、若者ケアラーを対象にした場合は、「友だち関係のこと」、「学校成績のこと」及び「自分に自信が持てないこと」と答えた者が 50.0%（1 人）という結果になった。

１４．過去のケアの経験他

介護福祉学校の学生を対象に、過去のケアの経験を尋ねたところ、お世話をしている人が「いた」と回答した者（3 人）が 12.5%となり、前回の 29.0%から 16.5 ポイント低下した。なお、これを若者ケアラーに対象を絞ると 2 人中 1 人（50.0%）がケアの経験があると回答し、ケアに連続性がある結果になった。

なお、ケアにあたり困りごとや悩み事があった者は 3 人中 2 人であり、理由としては「本人の意思を引き出せない。病院の対応。」という回答や「母の疾患のため。今までの生活と変わらず、友人との遊ぶ時間が少し減ったことはあった。」とケアの対応や日常生活での制限される回答だった。

また、これから進学するにあたりケアの事情で進学・就職が制限される者は 1 人であり、現在ケアを行っていないが、家族や友人に相談することはできているという結果になった。

設問：過去に家族の中で、あなたがお世話している人（高齢や病気、身体が不自由、きょうだいの面倒を見る）がいましたか

設問：過去に、家族の中で、あなたがお世話をする際に、困りごとや悩みごとがありましたか。「あった」と回答した人は、その内容を記入してください。

設問：これから進学・就職するにあたり、家族のケアが理由で、進学・就職先が制限されることはありますか。「ある」と答えた方は、その理由を記入してください。

設問：進学・就職するにあたり、家族のケアが理由で、進学先・就職先が制限されることを、周りに相談したことがありますか。「ある」と回答された方は、相談相手を教えて下さい。（〇の数は自由です）

Ⅲ　分　析

この分析は、本年度の調査の傾向及び今回を含め過去２回行った調査結果を比較・検証したものである。

１．小学生

（１）ヤングケアラーについて、ヤングケアラーという言葉の認知度

【ヤングケアラーの言葉の認知度】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー　一般：非ヤングケアラー

設問/年度・対象（小学生）	Ｒ７（YC18 人）		Ｒ５（YC15 人）		Ｒ４（YC9 人）	
	YC	一般	YC	一般	YC	一般
聞いたことがあり、内容をよく知っている	**22.2%（4 人）**	21.4%（28 人）	**26.7%（4 人）**	39.1%（63 人）	**33.3%（3 人）**	43.2%（63 人）
聞いたことがあるが、よく知らない	**22.2%（4 人）**	38.2%（50 人）	**33.3%（5 人）**	23.6%（38 人）	**33.3%（3 人）**	25.5%（38 人）
聞いたことがない	**50.0%（9 人）**	21.4%（28 人）	**33.3%（5 人）**	34.2%（55 人）	**33.3%（3 人）**	32.2% 48 人

※上記の表の結果は回答のうち無回答を除いているため、回答の割合は必ずしも 100%にはならない。

ヤングケアラー18 人のうち、ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがあり、内容をよく知っている」4 人(22.2%)、「聞いたことがあるが、よく知らない」4 人(22.2%)、「聞いたことがない」9 人(50.0%)だった。非ヤングケアラーでは、ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがあり、内容をよく知っている」28 人（21.4%)、「聞いたことがあるが、よく知らない」50 人（38.2%)、「聞いたことがない」28 人（21.4%）だった。

「ヤングケアラー」は「非ヤングケアラー」を比べて、ヤングケアラーの認知度は低い傾向にある。これは全３回の調査とも同じ傾向にあることがわかった。

（２）ヤングケアラー18 人は、誰をどのような理由で、どれくらいケアしているか。

【ヤングケアラーのケア対象】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー

ケア対象／年度	Ｒ７（YC18 人）	Ｒ５（YC15 人）	Ｒ４（YC9 人）
きょうだい	**66.7%（12 人）**	80.0%（12 人）	77.8%（ 7 人）
父親	**5.5%（ 1 人）**	6.7%（ 1 人）	0.0%（ 0 人）
母親	**5.5%（ 1 人）**	6.7%（ 1 人）	11.1%（ 1 人）
祖父	**11.1%（ 2 人）**	13.7%（ 2 人）	11.1%（ 1 人）
祖母	**11.1%（ 2 人）**	0.0%（ 0 人）	0.0%（ 0 人）

お世話をしている人（複数回答）は、「きょうだい」12 人（66.7%）、「祖父」及び「祖母」が 2 人（11.1%）、「母親」及び「父親」1 人（5.5%）であり、「きょうだい」をケアしているヤングケアラーが多い。これは令和４年度及び令和５年度調査も同様である

お世話をしている理由（複数回答）は、「きょうだい」で、「幼いため」が 12 人（66.7%）、「高齢のため」4 人（22.2%）、「お酒などをやめられなくなっているため」が 1 人（5.6%）だった。年の離れているきょうだいを世話しているヤングケアラーが多い。

ケアの開始年齢は、「小学校の入学前」が 8 人（44.4%）、「４年生の頃から」4 人（22.2%）と**ヤングケアラーの半数近くが小学校入学前から低学年にかけて長期にわたりケアしていることがわかった。**

（３）ケアすることによる影響

学習や生活面に影響のある児童は、**13 人（72.2%）になり、全体の 70%強の児童の学習や生活面に影響が出ている。**

ケアすることにより影響の出ている児童の属性では、家族構成（複数回答）で見ると、「母親」13 人、（100%）、「父親」11 人（84.6%）、「きょうだい」10 人（76.9%）、「祖母」5 人（38.5%）、「祖父」4 人（30.8%）となった。

ケアをしている対象は、「きょうだい」が 10 人（76.9%）、「祖母」4 人（30.8%）及び「祖父」3 人（23.1%）及び「父親」及び「母親」が 1 人（7.7%）になり、ケアの対象は「きょうだい」が多いものの、多岐に渡ることがわかった。

ケアの理由（複数回答）としては、「まだ幼いため」が 9 人（69.2%）、「高齢のため」4 人（30.8%）、「お酒などをやめられなくなってしまうため」1 人（7.7%）、「その他」3 人（23.1%）になり、ケアすることで影響を受けている**児童の大多数が「幼いきょうだいの世話をしている」または「高齢者のケア」をしていることがわかった。**

（４）ダブルケアの可能性

ヤングケアラーに、今後のケアの可能性を訪ねたところ、7 人（38.9%）があると回答した。7 人の内訳は、「きょうだい」4 人（57.1%）、「父親」3 人（42.9%）、「母親」及び「祖母」3 人（42.9%）、「祖父」2 人（28.6%）となり、ケアに対しての不安があるヤングケアラーは 6 人（85.7%）となった。

（５）希望する支援

ヤングケアラーが学校の先生や周囲の大人に支援してほしいこと（複数回答可）は、「自分のいまの状況について話を聞いてほしい」が 2 人（11.1%）、「病気や障がい、お世話の仕方についてわかりやくす説明してほしい」が 1 人（5.6%）であり、ヤングケアラー自身の心理面でストレスを抱えていることや、具体的にケアに携わっている、またはそのためにどうしたらよいのか悩んでいることがわかる。

（６）自己肯定感

【自己肯定感】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー　一般：非ヤングケアラー

設問/年度・対象（小学生）	**Ｒ７（YC18 人）**		Ｒ５（YC15 人）		Ｒ４（YC9 人）	
	YC	一般	YC	一般	YC	一般
自分に自信がないこと	**16.7%** **（3 人）**	16.1% （18 人）	**26.7%** **（4 人）**	15.5% （25 人）	**11.1%** **（1 人）**	5.7% （25 人）

ヤングケアラー生活の悩みでは、「友だち関係」及び「将来（進路）のこと」が5人（27.8%）、「塾や習い事のこと」、「家庭の金銭のこと」及び「自分に自信がないこと」が3人（16.7%）になった。一方で、非ヤングケアラーの場合は、「友だち関係」は22人（19.5%）、「将来（進路）のこと」24人（21.2%）、「塾や習い事のこと」8人（7.1%）、「家庭の金銭のこと」5人（4.4%）、「自分に自信がないこと」が18人（16.1%）になった。

ヤングケアラーの方が非ヤングケアラーよりも置かれている生活環境への悩み事が相対的に強い傾向があり、家庭の事情に左右される可能性がある。なお、ヤングケアラーは一般的に自己肯定感が低いといわれているが、小学生の場合は調査対象・年度によりばらつきがあるものの、同様に比較的に低い傾向があることが分かった。

２．中学生

（１）ヤングケアラーの「ヤングケアラー」という言葉の認知度

【ヤングケアラーの言葉の認知度】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー　一般：非ヤングケアラー

設問/年度・対象（中学生）	Ｒ７（YC8人）		Ｒ５（YC17人）		Ｒ４（YC8人）	
	YC	一般	YC	一般	YC	一般
聞いたことがあり、内容をよく知っている	**62.5%（5人）**	60.4%（142人）	**23.5%（4人）**	34.8%（77人）	**62.5%（5人）**	51.1%（84人）
聞いたことがあるが、よく知らない	**37.5%（3人）**	29.8%（70人）	**29.4%（5人）**	43.9%（97人）	**12.5%（1人）**	31.6%（54人）
聞いたことがない	**0.0%（0人）**	1.7%（4人）	**29.4%（5人）**	15.4%（34人）	**0.0%（0人）**	16.1%（28人）

※上記の表の結果は回答のうち無回答を除いているため、回答の割合は必ずしも100%にはならない。

ヤングケアラー8人のうち、ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがあり、内容をよく知っている」5人（62.5%）、「聞いたことがあるが、よく知らない」3人（37.5%）とすべてのヤングケアラーは言葉自体を認知しており、「聞いたことがない」という回答はなかった。

非ヤングケアラーでは、ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがあり、内容をよく知っている」142人（60.4%）、「聞いたことがあるが、よく知らない」70人（29.8%）、「聞いたことがない」4人（1.7%）だった。

中学生全体での認知度は大幅に向上しており、令和５年度よりヤングケアラーの出前講座を小中高校及び介護福祉学校に対して行っていることで一定の成果があると受け取ることができる。

（２）ヤングケアラー8 人は、誰をどのような理由で、どれくらいケアしているか。

【ヤングケアラーのケア対象】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー

ケア対象／年度	**Ｒ７（YC8 人）**	Ｒ５（YC17 人）	Ｒ４（YC8 人）
きょうだい	**62.5%（5 人）**	64.7%（11 人）	50.0%（4 人）
父親	**0.0%（0 人）**	5.9%（1 人）	0.0%（0 人）
母親	**12.5%（1 人）**	5.9%（1 人）	25.0%（2 人）
祖父	**0.0%（0 人）**	5.9%（1 人）	25.0%（2 人）
祖母	**0.0%（0 人）**	11.8%（2 人）	0.0%（0 人）

お世話をしている人（複数回答）は、「きょうだい」5 人（62.5%）、「母親」1 人（12.5%）であり、きょうだいをケアしているヤングケアラーが多い。(2 人は無回答)

お世話をしている理由（複数回答）は、「幼いため」が 4 人（50.0%）、「身体や心に障がいがあるため」が 2 人（25.0%）、「認知症のため」が 1 人（12.5%）だった。年の離れているきょうだいを世話しているヤングケアラーが半数になった。

ケアしている年齢は、「小学校入学前から」が 3 人（37.5%）、「小学生の時から」4 人（50.0%）、「中学校 1 年生の時から」1 人（12.5%）になった。

ヤングケアラーが小学生前からを含めて長期にわたってお世話・ケアしているヤングケアラーが 87.5%になり、ケアが長期化している。就学前からケアに携わっているヤングケアラーもいることがわかる。

（３）ケアすることによる影響

学習や生活面に影響のある生徒は 4 人（50.0%）になり、半数の生徒に学習や生活面に影響が出ている。

ケアすることにより影響の出ている生徒の属性を家族構成（複数回答）で見ると、「母親」4 人、（100%）、「父親」及び「きょうだい」3 人（75.0%）となり祖父母等の同居ケースはなかった。調査結果をみると**ケアすることによる影響が出ている生徒全てに母親がいる、また、父親ときょうだいとの同居率も高い。**

ケアすることによる影響を受けている生徒のケア対象は、「きょうだい」が 3 人（75.0%）、「母親」1 人（25.0%）になった。そのケア・お世話の理由（複数回答可）としては、「身体や心に障がいがあるため」が 2 人（50.0%）、「幼いため」と「病気やけがのため」が 1 人（25.0%）になった。ケアに影響のあるヤングケアラーは、そのケア対象は多岐に渡ることがわかった。

（４）ダブルケアの可能性

また、ヤングケアラーに、今後のケアの可能性を訪ねたところ、2 人（25.0%）があると回答し、「きょうだい」及び「母親」1 人（50.0%）となり、ケアに対しての不安があるヤングケアラーは 2 人（25.0%）となった。

（５）希望する支援

なお、ヤングケアラーが学校の先生や周囲の大人へ支援してほしいこと（複数回答）は、「特にない」とすべてのヤングケアラーが回答している。この点は、課題として存在していても、そのことをヤングケアラー自身が認識していない可能性もあり、丁寧な対応が必要になる。

（６）自己肯定感

【自己肯定感】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー　一般：非ヤングケアラー

設問/年度・対象（中学生）	Ｒ７（YC8 人）		Ｒ５（YC17 人）		Ｒ４（YC8 人）	
	YC	一般	YC	一般	YC	一般
自分に自信がないこと	**0.0%** **(0 人)**	11.5% (27 人)	**5.9%** **(1 人)**	9.0% (20 人)	**37.5%** **(3 人)**	21.8% (38 人)

自己肯定感は中学生の場合、調査年度により自己肯定感が高い傾向の年度もあり、ヤングケアラーは必ずしも低いといえない結果になった。

３．高校生

（１）ヤングケアラーの「ヤングケアラー」という言葉の認知度

【ヤングケアラーの言葉の認知度】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー　一般：非ヤングケアラー

設問/年度・対象（高校生）	Ｒ７（YC2 人）		Ｒ５（YC1 人）		Ｒ４（YC4 人）	
	YC	一般	YC	一般	YC	一般
聞いたことがあり、 内容をよく知っている	**100%** **(2 人)**	63.2% (71 人)	**0.0%** **(1 人)**	43.9% (29 人)	**0.0%** **(0 人)**	37.3% (38 人)
聞いたことがあるが、 よく知らない	**0.0%** **(0 人)**	17.9% (21 人)	**100%** **(1 人)**	36.4% (24 人)	**0.0%** **(0 人)**	18.6% (19 人)
聞いたことがない	**0.0%** **(0 人)**	3.4% (4 人)	**0%** **(0 人)**	15.2% (34 人)	**100.0%** **(4 人)**	38.2% (39 人)

※上記の表の結果は回答のうち無回答を除いているため、回答の割合は必ずしも 100%にはならない。

ヤングケアラー2 人のうち、ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがあり、内容をよく知っている」2 人（100%）であり、ヤングケアラーは言葉自体を認知しており、「聞いたことがあるが、よく知らない」と「聞いたことがない」という回答はなかった。

非ヤングケアラーでは、ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがあり、内容をよく知っている」71 人（63.2%）、「聞いたことがあるが、よく知らない」21 人（17.9%）、「聞いたことがない」4 人、（3.4%）だった。

高校生全体での認知度は中学生同様に大幅に向上しており、令和５年度よりヤングケアラーの出前講座を小中高校及び北海道介護福祉学校に対して行っていることで一定の成果があったと思われる。

（２）ヤングケアラーは、誰をどのような理由で、どれくらいケアしているか。

【ヤングケアラーのケア対象】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー

ケア対象／年度	**Ｒ７（YC2 人）**	Ｒ５（YC1 人）	Ｒ４（YC4 人）
きょうだい	**50.0%（1 人）**	0.0%（0 人）	50.0%（2 人）
父親	**50.0%（1 人）**	100.0%（1 人）	0.0%（0 人）
母親	**0.0%（0 人）**	0.0%（0 人）	25.0%（1 人）
祖父	**0.0%（0 人）**	0.0%（0 人）	0.0%（0 人）
祖母	**0.0%（0 人）**	0.0%（0 人）	0.0%（0 人）

ヤングケアラー2 人のうち、お世話をしている対象は、「父親」及び「きょうだい」1 人（50.0%）と回答した。お世話をしている理由（複数回答可）は、「身体や心に障害があるため」と「幼いため」とそれぞれ回答し、ケアの開始年齢は 2 人とも「小学生の頃」と回答している。

（３）ケアすることによる影響

学習や生活面に影響のある生徒は 2 人（100%）になり、すべてのヤングケアラーの生徒の学習や生活面に影響が出ている。なお、うち１人はアルバイトをすることで家計を助けていると回答した。

ケアすることにより影響の出ている生徒の属性を家族構成（複数回答）で見ると、「母親」、「父親」及び「きょうだい」2 人（100%）、「祖母」及び「その他」1 人（50.0%）となった。この結果からは、**ケアすることによる影響が出ている生徒全てに父親、母親及びきょうだいがいる。なお、その他の回答には、家庭環境によりヤングケアラーでお世話をする対象がいるも、栗山高等学校には女子野球部に起因する学生寮が存在するため、具体的なケアを行っていない可能性があることにも留意する必要がある。**

ケアすることによる影響を受けているヤングケアラーのケア対象は、「きょうだい」及び「父親」1 人（50.0%）になった。理由（複数回答可）としては、「幼いため」及び「身体や心に障がいがあるため」が 1 人（50.0%）になった。ケア対象によりケア内容が変わることがわかる。

（４）ダブルケアの可能性

ケアすることによる影響を受けているヤングケアラーに、今後のケアの可能性を訪ねたところ、1 人（50.0%）が「ある」と回答し、内訳は「父親」及び「祖母」1 人となり、ケアに対しての不安がある結果になった。

なお、ヤングケアラーが学校の先生や周囲の大人へ支援してほしいこと（複数回答）は、「特にない」が 2 人になったが、この点は、個別的に配慮する必要性がある。

（５）自己肯定感

自己肯定感は高校生の場合、サンプル数が少ないため断定することは難しいが、**調査年度により自己肯定感の高低にはばらつきがある結果になった。**

【自己肯定感】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー　一般：非ヤングケアラー

設問/年度・対象（高校生）	Ｒ７（YC2 人）		Ｒ５（YC1 人）		Ｒ４（YC4 人）	
	YC	一般	YC	一般	YC	一般
自分に自信がないこと	**0.0%** **(0 人)**	13.7% (16 人)	**100.0%** **(1 人)**	9.1% (6 人)	**50.0%** **(2 人)**	22.5% (23 人)

４．介護福祉学校

（１）若者ケアラーの「ヤングケアラー」という言葉の認知度

【ヤングケアラーの言葉の認知度】　単位　ＹＣ：ヤング（若者）ケアラー　一般：非ヤングケアラー

設問／年度・対象（介護福祉学校）	Ｒ７（YC2 人）		Ｒ５（YC3 人）		Ｒ４	
	YC	一般	YC	一般	YC	一般
聞いたことがあり、 内容をよく知っている	**100%** **(2 人)**	63.2% (18 人)	**100%** **(3 人)**	100% (30 人)	未調査	
聞いたことがあるが、 よく知らない	**0.0%** **(0 人)**	17.9% (1 人)	**0.0%** **(0 人)**	0.0% (0 人)		
聞いたことがない	**0.0%** **(0 人)**	0.0% (0 人)	**0.0%** **(0 人)**	0.0% (0 人)		

※上記の表の結果は回答のうち無回答を除いているため、回答の割合は必ずしも 100%にはならない。

ヤングケアラー2 人のうち、ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがあり、内容をよく知っている」と 2 人とも回答した。

非ヤングケアラーでは、ヤングケアラーという言葉を「聞いたことがあり、内容をよく知っている」18 人（81.8%）、「聞いたことがあるが、よく知らない」1 人（4.5%）、無回答 4 人、（13.7%）だった。

介護福祉学校では、授業の中でヤングケアラーについて触れていることに併せて、令和６年度よりヤングケアラーの出前講座を開催していることもあり、ヤングケアラーへの認識が高い数値で推移している。

（２）若者ケアラー2 人は、誰をどのような理由で、どれくらいケアしているか。

お世話をしている人（複数回答）は、「祖母」及び「きょうだい」1 人（33.3%）だった。

お世話をしている理由（複数回答）は、「高齢のため」及び「幼いため」が 1 人（50.0%）だった。なお、ケアの開始年齢は「中学生の頃から」及び「介護福祉学校に入学してから」1 人（50.0%）と対象によって開始年齢に差が出ることがわかった。

（３）ケアすることによる影響

【自己肯定感】　　単位　ＹＣ：ヤング（若者）ケアラー　一般：非ヤングケアラー

設問／年度・対象（介護福祉学校）	Ｒ７（YC2 人）		Ｒ５（YC3 人）		Ｒ４
	YC	一般	YC	一般	
自分に自信がないこと	**50.0%** **（1 人）**	12.5% （3 人）	**66.7%** **（2 人）**	25.9% （7 人）	未調査

若者ケアラーのすべてが、学習や生活面に影響はないと答え、学校の先生や周囲の大人へ支援してほしいことも「ない」**と答えたが、若者ケアラーに**、今後のケアの可能性を訪ねたところ、1 人（50.0%）があると回答し、父親、母親、祖母、きょうだいと回答した。この対象者は、不安はないと回答するもののケア対象者が介護状態になった場合の生活環境の変化には配慮が必要になる可能性がある。

また、**自己肯定感は若者ケアラーの場合、高校生同様にサンプル数が少ないため断定することは難しいが、自己肯定感が低い傾向になった。**

Ⅳ．まとめ

ここでは、今回のヤングケアラー実態調査の結果と、今回を含めた過去２回の調査について、その傾向をまとめたものである。

１．各年度におけるヤングケアラーの割合と認識

【ヤングケアラーの割合と認識】　※（　）はヤングケアラーの実数

学校別／年度	Ｒ７	Ｒ５	Ｒ４
小学校	**13.7%（18 人）**	9.3%（15 人）	5.7%（ 9 人）
中学校	**3.4%（ 8 人）**	7.6%（17 人）	4.6%（ 8 人）
高校	**2.7%（ 2 人）**	1.5%（ 1 人）	3.9%（ 4 人）
全体	**5.8%（28 人）**	7.4%（33 人）	4.8%（21 人）
「ヤングケアラー」という言葉を聞いたことがあり、内容をよく知っている	**37.9%（11 人）**	27.3%（ 9 人）	38.1%（ 8 人）

本年度の調査でヤングケアラーと思われる子どもは、町内で 28 人になった。内訳は、小学生で 13.7%（18 人）、中学生で 3.4%（8 人）、高校生で 2.7%（2 人）という結果になった。総数は前回の調査（33 人）よりも 5 人ほど少ないが、ほぼ同等数のヤングケアラーと思われる子どもが存在する結果になった。なお、令和４年度の小学校６年生は令和５年度の中学校１年生、令和４年度の小学校６年生、令和５年度の小学校５・６年生は、令和７年度の中学校１年生から３年生に学年スライドしていくが、それぞれ幼いきょうだいの成長とともに世話が解消される可能性からか、必ずしも数値的にはスライドされるべきものではないこともわかる。ただし、ヤングケアラーの支援は数量的な課題よりも、対象の子どもたちを個別的に状況把握し、より慎重に判断する必要がある。そのため、各学校と連携した見守りと支援が重要であり、町としてどのように支援していくかが課題である。

また、小学生では低学年から、中学生では就学前からケアを担う者がいるため、前回の調査同様、小さい子だからケアをしないということではなく、どの学年でも常にケアをする子どもがいるという視点は、引き続き持たなくてはならない。

なお、ヤングケアラーの出前講座を令和５年度より町、町教委、社協により協働で開催している。上記の表のとおり、ヤングケアラーの言葉の理解や認識が高いことと、ヤングケアラーの実数が多いことには直接の相関関係は認められないが、同講座は、子どもたちが自己の置かれている環境への気づきと発信力を高めることを目的として行うものであり、言葉を認知しているヤングケアラーの対象者数は増加している。また、周りの大人の気づき、地域連携による支援方法について知ることを目的としている。

ヤングケアラーの言葉の理解や認識をしている子どもの全体数では、令和７年度は 63.2%（253 人）、令和５年度 37.7%（169 人）、令和４年度 44.4%（193 人）と数量的にも構成比としても同様であることから、今後とも同講座の継続は必要なものである。

ヤングケアラーで学習や生活面に影響が出ている子どもの数は、小学校で 72.2%（13 人）、中学校で 50.0%（4 人）になり、半数以上の子どもに影響が出ていると回答している。また、大人に対して支援を求める内容は小学生に多く見られ、「自分の今の状況について話を聞いてほしい」や「病気や障がい、お世話の仕方についてわかりやすく教えてほしい」と、一人で悩みを抱え込んでいる可能性や具体的なケアの場面にどうすればよいのかというものであり、個別に状況を把握し支援する必要がある。

介護福祉学校では、介護福祉の専門学校という特殊性を考慮しながらも 12 人に 1 人が若者ケアラーの対象になったが、生活・学習面に影響はないと回答した。今後ダブルケアを含めて将来のケアに不安を抱いていることから、学校全体での不安を解消できる相談体制などを充実させることが重要である。

２．ケアの受け止め方

【ケアの受け止め方】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー

回答／年度	**Ｒ７（YC28 人）**	Ｒ５（YC33 人）	Ｒ４（YC21 人）
体が疲れる	**50.0%（14 人）**	27.3%（ 9 人）	47.6%（10 人）
つらい気持ちになる	**14.3%（ 4 人）**	6.1%（ 2 人）	14.3%（ 3 人）
時間の余裕がない	**17.9%（ 5 人）**	3.0%（ 1 人）	33.3%（ 7 人）
やりがいを感じる	**32.1%（ 9 人）**	9.1%（ 3 人）	14.3%（ 3 人）
楽しい	**42.9%（12 人）**	24.2%（ 8 人）	47.6%（10 人）
充実している	**25.0%（ 7 人）**	12.1%（ 4 人）	23.8%（ 7 人）
特に感じていない	**0.0%（ 0 人）**	30.3%（10 人）	14.3%（ 3 人）

ヤングケアラーのケアの受け止め方は、各年度ともにばらつきがあるが、「体が疲れる」と「楽しい」という回答が上位を占めており、家庭内のケアやお世話に関しての役割・目的意識がある一方で、身体的な負担が存在するヤングケアラーが一定数いることがわかる。「充実している」や「やりがいを感じる」などの受け止め方はヤングケアラー自身の成長にもつながる重要な受け止め方にもつながる。そのため「体が疲れる」、「つらい気持ちになる」の回答から、ヤングケアラーは一方的に身体や精神的に追い詰められている対象や救済しないといけない対象という偏った見方に立つのではなく、個別性に配慮しながら「楽しい」という受け止め方がネガティブな受け止め方に転換し、心身の負担につながらないような支援体制の在り方や、ヤングケアラーの理解を深め自身の「気づき」に繋げるための周知活動を行うのにあたっての重要な示唆を含むものである。

３．各年度におけるヤングケアラーの日常生活における悩み・困り事

【日常生活での悩み・困りごと】　　単位　ＹＣ：ヤングケアラー

回答／年度	**Ｒ７（YC28 人）**	Ｒ５（YC33 人）	Ｒ４（YC21 人）
友だち関係のこと	**21.4%（ 6 人）**	6.1%（ 2 人）	23.8%（ 5 人）
学校の成績のこと	3.6%（ 1 人）	6.1%（ 2 人）	**52.4%（11 人）**
将来（進路）のこと	**21.4%（ 6 人）**	6.1%（ 2 人）	**42.9%（ 9 人）**
塾や習い事ができないこと	14.3%（ 4 人）	3.0%（ 1 人）	0.0%（ 0 人）
家庭の金銭のこと	14.3%（ 4 人）	0.0%（ 0 人）	19.0%（ 4 人）
自分と家族との関係のこと	10.7%（ 3 人）	6.1%（ 2 人）	19.0%（ 4 人）
家族内の人間関係のこと	7.1%（ 2 人）	6.1%（ 2 人）	9.5%（ 2 人）

自分のために使える時間が少ないこと	10.7%（ 3人）	0.0%（ 0人）	19.0%（ 4人）
自分が自由に過ごせる場所がないこと	7.1%（ 2人）	0.0%（ 0人）	19.0%（ 4人）
自分に自信が持てないこと	**14.3%（ 4人）**	**15.2%（ 5人）**	**28.6%（ 6人）**
特にない	**50.0%（14人）**	**57.6%（ 19人）**	**28.6%（ 6人）**

本年度のヤングケアラーにおける困りごとの上位３位は、「特にない」が最も高く 50.0%、「友だち関係のこと」と「将来（進路）のこと」が 21.4%となった。

今回の調査対象のヤングケアラーは、小中高校全体と自己肯定感は変わらないものの、学業のことには不安を覚えていないが、置かれている家庭環境で習い事や、金銭面など身の回りの生活につながる部分での不安を抱えている子どもが多い傾向になったと述べた。しかし、これを過去の調査と比較すると、調査年度によって、結果のばらつきがわかる。

これは、ヤングケアラーの置かれている環境が一定の悩み・困りごとがあるという傾向を示す。例えば「ヤングケアラーは家庭内のケア・お世話が忙しく、友人関係や学業に支障をきたしている子どもが多いというイメージがある」などの安易なステレオタイプによるヤングケアラー像を否定するものであり、個別的にケースを把握することで、ヤングケアラーの子どもたちがそれぞれ抱えている課題にどのように向き合うかということを示している。

ただし、「特にない」及び「自分に自信が持てないこと」が調査結果の上位になる傾向があることから、「特にない」という回答が「問題と認識しているかどうか」という点において丁寧に対応し見極める必要性がある。そして、自己肯定感が低い子どもたちが確かに存在するために、居場所づくりやケアから離れる時間づくりなど、ネガティブなイメージを抱くヤングケアラーの場合がいる場合には、支援介入が必要なケースも含めて自己肯定感を高めることのできる環境整備が求められる。

４．調査結果に基づいた今後の支援について

今回の調査では、ヤングケアラーと思われる子どもが町内に２８人存在することがわかった。当町では、これまでにも同様の実態調査を３回行ってきたが、その結果を分析すると、調査によって明確な「ヤングケアラー像」を導き出すのは難しいことがわかった。これが意味するのは「ヤングケアラー」という言葉による偏ったイメージ像が独り歩きするのではなく、子どもの個別性に応じた支援を行う必要性がより明らかになったともいえる。つまり、大人の一方的な見解に基づく「ヤングケアラー」像に基づくものではなく、「子どもを真ん中」においた支援とそのプロセスにおいて、「ヤングケアラー」を捉えるという把握方法での本人像の明確化である。

本町では、子育て支援センターと町教育委員会において役割分担を行いながら、子どもへの支援の中でヤングケアラー支援を位置づけているところであるが、この調査結果から見ても、本人像を明確化する過程とその支援プロセスにおいて、より有効性が高い方法は、令和６年度より進めているヤングケアラーの早期発見と実態把握のアセスメントであり、より実効性のある活用が求められる。

また、ヤングケアラー対象者数が経年において変化する点では、小中高校間において連続性のあるヤングケアラーの情報の共有化により、支援の見極めが必要であることも示唆する結果になった。ヤングケアラーの実態調査の時期を起点とした各学校との情報交換やケース会議において、継続的に対象の子どもがヤングケアラーかどうかの確認作業を行うことと、その情報共有及び学校間の連携が必要性である。

さらに、毎年実施しているヤングケアラーの出前講座により、町内の子どもたちのヤングケアラーに関する認知度は向上していることが調査結果からも明らかになっていることから、町全体での広報啓発活動の底上げと併せて、出前講座自体が一時的なものではなく、普遍的なものとしても教育のカリキュラムに落とし込むことが可能かどうかを検討していくことが望ましいと思われる。

本町におけるヤングケアラー支援の基本方針（令和８年度以降）

（１）子育て支援センター及び教育委員会が連携した支援体制とアセスメントの充実化
（２）ヤングケアラー出前講座（研修会含む）の普遍化と地域（住民・事業所）への拡大
（３）栗山町ケアラー支援推進計画と連動したヤングケアラー実態調査の継続（３年１回）